

二〇二一年度入学試験問題 (第二回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから17ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。、「」はそれぞれ一字と考えなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

朝、目覚めてすぐに見えるのは、少しくすんだ白い天井。

そこに、小さなしみがある。ぽつぽつと、普通なら気づかないくらいに淡い茶色のしみ。

いつ頃から、どうしてそんなところに浮かび上がったのかわからないけど、私がこのベッドで目覚めるようになってから、ずっとそこにある。一、二、三、四……全部で七つの点々。

そっけない部屋の、そっけない風景。あまりにも退屈で、私はそのしみを星座に見立てて、「TM312」と名前をつけた。Tは私の名前の頭文字、Mはこの病院の頭文字。312は、私がこうして横たわっている病室の番号。

そっけない名前の星座だなあ。
白鳥座とかオリオン座とか北斗七星とか、星座にはロマンチックな名前がつきものだ。けれど、何もかもがそっけない部屋の中で、気の利いた呼び名なんかつけてしまうのがもつたない気がしていた。

だいいち、そんなに思入れもないし。かわいい名前なんかつけちゃって、愛着持っちゃうのなんか絶対いやだし。

ほんものの星座を見上げなくなつて、もう十二年が経つ。とはいえ、ここへ来るまえも、夜空を見上げて星座を探すことなんてめつたになかったけど。

私はごく普通の十八歳、だった。サラリーマンの父と専業主婦の母、年の離れた兄がいる普通の家庭に育ち、地元の子高に通い、読書が趣味で、作文が得意だった。

本屋の店員のバイトをしていて、その店長(二十代・妻子あり)にほのかな恋心を抱いていた。勝手にときめいていただけで、何も起こらなかったけど。

もやもやする思いがうつつとうしくて、日記やら詩やら童話やら、あれこれ書き散らした。あの頃、何かを書くことが

X

を晴らす唯一の方法だった、と思う。

そんなふうにして、むしろくしゃと書き上げた小さな物語。小さな女の子が登場する、ごく短い童話だった。近所に住んでいた父方のおじいちゃんに見せた。なぜって、私とおじいちゃんはけっこう仲良しだったし、老人は子供に近いかな? なんて思ったから。

おじいちゃんは、ふむふむ、と読んで、ちよつとこれ借りるよ、と持っていってしまった。それが奇跡の始まり。

おじいちゃんは、その童話を国際児童文学コンクールに出

してしまつたのだ。私にひと言の断りもなく。

そしてなんと、一番大きな賞をもらつてしまつたのだ。

急激に、私の周辺が変わつた。私は祝福され、現役女子高生、ということもあつてか、たくさんの取材を受けた。受賞作は絵本になり、日本とアメリカとフランスで出版され、*印税とやらが入つてきた。華やかでまぶしい光の中に、私は突然放りこまれた。喜んで、戸惑つて、怖くなつた。こんないいことはそんなに長く続かないんじゃないか。何か落とし穴のようなものが準備されていて、それに向かつて歩いていゝるんじゃないか。そんなふうにも思つた。

受賞のわずか七カ月後。本当に、落とし穴が待つていた。

初めてのサイン会が、かつてバイトをしていた書店で開かれた。地元の新開やテレビも取材にやつてきた。小さな子供たち、中学生や高校生。憧れの店長が見ている中でインタビューが誇らしかつた。

ひとりひとり握手をするうちに、どうにも手が疲れて、相手の手を握れなくなつた。力なく差し出す手を、みんなぎゅっと握ってくれるのに、私は握り返せない。何これ、どうして、と焦つた。

「ちゃんと握手もしてくんないの。感じわる〜」

同い年くらいの女の子が、ひそひそ言うのが耳に入った。

五十人近く握手をしただらうか。最後のひとりの手が離れた瞬間に、私はその場で倒れてしまつた。そのまま、入院となつた。

*筋ジストロフィー、と病名を告げる医師の声が遠くで聞こえた。

入退院を繰り返し、五年まえ、本格的に歩けなくなつた。治療とリハビリを兼ねて入院した。またすぐ出るつもりだつた。

けれどそれつきり、この部屋とこのベッドが私の世界のすべてになつた。

^c天井のしみが星座に見えてくるほど、私はもうずっと横たわつたままなのだ。

(中略)

「あのう、すみません。何か……書いてらっしゃるんですか?」

ベッドまわりのカーテンを開けばなしにして、私と母が「共同作業」をしているところに、江口さんが遠慮がちに声をかけてきた。

「ああ、これ? 娘が話すのを、私が書き取つてるんですよ」

母がノートをちらりと見せて、笑顔で答えた。江口さんは、へえ、と好奇心を隠さない。

「毎日、一生懸命に話してらっしゃるから……ところどころ、聞こえてきました。魔法使用とか、ブランクとか、……ええと、*メッコとラレッコ、とか」

私は思わず「ええ、恥ずかしいなあ」と、締まりのない声を出した。のどの筋肉に力が入らなくて、そんな情けない声になってしまふ。だから、母と看護師以外とは極力話さないようにしているんだけど。

江口さんが斜め向かいのベッドに来て、四日目だった。D
はなんとなく、このはつらつとした若い女性が嫌いじゃなかった。

入院したとき、「しばらくご厄介になります」と若い女性らしからぬあいさつをしてくれた。

そして、母にさりげなく私の病気について尋ねた。見るからに重病患者っぽい私に接するとき、たいてい誰もが気おくれしてしまって、病気について訊くことを避ける。けれど江口さんは「大変なご病気なんです」と認めつつ、「お母さんと二人三脚なんです。いつもおふたり一緒なんて、すてきな」と、ちよつとوراやましそうな表情で言っていた。

その反応がとても新鮮だった。

朝になれば、おふとんをきちんとたたんで、ベッドのまわりのカーテンを隅々まで開ける。サイドテーブルにはかわいい花模様のコップ、「マリメッコ」の花柄だ。枕もとには文庫本が二冊。短期入院者ほど雑誌の類を読み散らかして、表紙の毒々しい色が目につくんだけど、彼女のまわりはすっきりとして、なんだかすがすがしい空気が流れている。

夜中にナースコールしてしまうのも、実は本気で戸塚さんを心配しているのだ。看護師が去ってしまったあとも、しばらく戸塚さんのそばに座っている。「大丈夫おばあちゃん？」と囁きながら、背中をさすってあげている。

なんだかいいなあ、江口さんて。

もつと話してみたいな、と思っていた矢先に、彼女のほうも私に興味を持ってくれたのだ。

「この子ね、物語を作るのが好きで。昔、本を出したこともあるのよ」

物怖じしない江口さんの態度が母を饒舌にした。いつも大切に持ち歩いている私の本を取り出して、江口さんに渡しながら、いまでも聞き取りで物語を作っているところだ、この物語を楽しみにしている母子がいる、毎日ファックスでおじ

いちゃんのところへ送るんだ、と矢継ぎ早に話した。

古ぼけた表紙の本を手に、江口さんは母の話にていねいに相槌を打った。そして母ではなく、私に話しかけてくれた。

「拝見してもいいですか？」

私は、ゆつくりうなずいた。

江口さんは、次々にページをめくった。最初はそろそろと、途中からとんどん速く。物語の世界に深く深く入っているのがわかる。私も、そうだった。十代の頃、二十歳の頃、彼女くらい年の頃。しだいに力が奪われていく身体を、できるだけ深く、高く、遠くまで、物語の中へと旅をさせた。

最後まで一気に読んで、江口さんはようやく顔を上げた。

「よかった。マリコちゃんとお母さん、一緒にいられて」

そう言って、微笑んだ。目にいっぱい涙を浮かべて。

本になった最初で最後の私の童話、『マリコの星座』。

大好きなお母さんが病気になって、ケンタウルスや白鳥がお母さんを天上へ連れていこうとするのを懸命に止める娘のマリコ。ケンタウルスは、「地上で苦しむよりも、星座になったほうがお母さんのためだ。時空を超えて、人間たちに

あがめられるんだぞ」と言うのに、マリコは反発する。

マリコのためにコロツケを揚げてくれるお母さん。ちょっと困った顔つきで家計簿とにらめっこするお母さん。山ほどの洗濯物を楽しそうに青空の下に干しているお母さん。

星座になって、なつてほしくない。いつまでもマリコと一緒にいて、この地上からあなたたちの星座を見上げ、大きいね、きれいだね、つておしゃべりしたいの。

ケンタウルスと言う。この世の生き物すべてには、限りある命がそなわっている。いつの日か、お母さんだけでなく、お父さんもマリコも、子犬のチイも、みんな星座になるのだよ。その日がくるからこそ、いまを大切に生きていきなさい。お母さんのコロツケに、家計簿に、洗濯物に、ありがとうって言うんだよ。

白鳥がはばたき、ケンタウルスは手を振って、夜空へ帰っていく。E
E
地上に残して。

「すてきななあ。このお話、本当にすてき」

何度も何度も繰り返し私の本を読んで、真美ちゃん——江口さんのファーストネーム——はため息をつく。あれから毎日、彼女は私のベッドにやってきて、母と私とおしゃべりを

した。もつとも、私は口をもごもごさせるばかりで、母に通訳してもらわざるを得なかったけれど。

母が家へ帰っているあいだも、真美ちゃんは私のそばに座っていてくれた。そして私が返事をする必要がないように、あれこれ自分から話しかけてくれた。母に代筆を頼んでいる「おじいちゃんが掃除をしている公園の母子のための物語」の感想や、最近読んだ本のことや、それから、ちよつとだけ自分のことも。

「実家を出ていまの会社で働いてて、なかなか母にも連絡できなかつたの。でも今回入院するとき、ひさしぶりに来てくれて……やつぱり、親っていいもんですね」

私はゆつくりとうなずく。真美ちゃんにはにっこりと笑顔になつた。

「お姉ちゃんがいるんです。結婚して、北海道に住んでるんだけど、……きのう電話して、たまにはお父さんお母さんともみんなでゆつくり集まろうよ、って提案したら、なによあんた、どういう風の吹き回し!? って言われちゃつた」

真美ちゃんのお姉さん、奈緒さんは、私と同年。道東で、夫婦ふたりで小さな宿を営んでいる。離れてもとつても仲良しのお姉さんのおもしろいエピソードをあれこれ話して

くれた。私は口の端を引つ張り上げるようにして笑つた。笑うのにもひと苦労なんだけど、どうしても微笑みたくなつた。真美ちゃんの家族が微笑ましかつた。平凡だけど小さな幸せを大切にしている家族。ちよつとوراやましかつた。もつと言うと、ほんのりくやしかつた。

「あ。たまきさん、笑うとすつごいかわいい。えくぼができるんだ」

真美ちゃんは、私の口もとを、ちよい、とつついた。私はいつそう口の端を引つ張り上げた。引きつったような顔になつてはらずだ。でも真美ちゃんは、かわいいかわい、と何度も言つて、楽しそうにえくぼをつついた。

妹って、こんな感じなのかな。

いつしか、そんなふうに思つていた。

真美ちゃんが一日も早く快復するのを祈りたい。でも元気になつたら、この部屋を出ていってしまう。元気なOL生活に戻つたら、きつと私のことなんて忘れてしまふだろう。ご両親とお姉さんと、ときたま会つて楽しく過ごして、いつか恋をして結婚して、小さな幸せな家庭を築いていくのだろう。

それは、すてきなことだつた。それが、真美ちゃんにはふ

さわしいことだった。それを、喜んであげたかった。

それなのに、一日一日、真美ちゃんが元気になっていく姿を、^Hなんとなくさびしく眺^{なが}めている私。

(原田マハ「名もない星座」による)

【注】

*印税——作品により得られる収入。

*筋ジストロフィー——筋肉がだんだん弱くなってくる病気。

*メッコとラレッコ——後に出てくる、おじいちゃんに送っ

ている物語の主人公の名前。

*戸塚さん——夜中にせきこんでしまう同室のおばあさん。

*饒舌——口数が多く、おしゃべりなこと。

*道東——北海道の東部。

問一——線部A「愛着持っちゃうのなんか絶対いやだし」とありますが、それはなぜか。理由を説明しなさい。

問二 空欄 X にあてはまる最もふさわしいことは次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 雨雲 イ うつぶん ウ うらみ エ 雪辱^{せつじょく}

問三 — 線部B「奇跡」について説明した次の文の空欄 a) f に入る最もふさわしいことばを文中からそれ

ぞれ抜き出したとき、そのことばのはたらきの組み合わせを、後から選び記号で答えなさい。

受賞し、受賞作が a が、私の書いた b を、私に c もなく、 d に出してしまい、そこで、一番大きな賞を
 e になり、 f で出版され、印税まで入ってきたこと。

- | | | | | | | |
|---|-------|------|------|------|------|------|
| ア | a 主語 | b 対象 | c 強調 | d 目的 | e 結果 | f 場所 |
| イ | a 前置き | b 強調 | c 並立 | d 目的 | e 原因 | f 材料 |
| ウ | a 前置き | b 対象 | c 並立 | d 相手 | e 原因 | f 場所 |
| エ | a 主語 | b 強調 | c 強調 | d 相手 | e 結果 | f 材料 |

問四 — 線部C「天井のしみが星座に見えてくる」とありますが、ここでの意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 病気によりなかなか退院できないイライラのため、天井のしみを星座に見立てて、現実の入院生活から目をそむけている。

イ 天井のしみに、星座のイメージを重ねることで、星空の下にいるような気分になり、前向きに入院生活を楽しもうとしている。

ウ あまりに長く入院しているので、無関係にならんだ天井のしみさえも、星座に見立てて、さまざまに想像をかきたてられてしまう。

エ 天井のしみがあまりにも現実の星座とならび方が似ていることに長い入院生活で気づき、いつか本当の星空を見たいと思っている。

問五 — 線部D「私はなんとなく、このはつらつとした若い女性が嫌いじゃなかった」とありますが、その理由として考えられるもののうち、四つを簡潔に答えなさい。

問六 — 線部E」しっかり手と手を結び合ったお母さんとマリコを、地上に残して」とありますが、この童話の終わり方は現在の「私」の気持ちと重なっている。ここから「私」の気持ちを読み取るとどのようなものになるか、最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア お母さんが私にコロツケを揚げてくれたり、洗濯してくれることなどに感謝するために、もう少し一緒に生きられる時間が欲しい。

イ 星座たちが夜空に帰ってしまいさびしいが、残されたお母さんと二人で強い気持ちを持って地上で生活していかなければならない。

ウ どんなに人間たちにあがめられても、手の届かない星座になってしまうのではなく、すぐとなりで今と一緒に生きることが幸せである。

エ ケンタウルスや白鳥のようにロマンチックな星座になるなら人間にあがめられもするだろうが、ただの星座になってもなんの意味もない。

問七 ——線部F「私が返事をする必要がないように」とありますが、それはなぜか。その理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 真美は自分で一方的に話すことが好きで、私の返事があると話が途切れるから。

イ 私が真美にわかるような声を出すことに苦労しないように、やさしく気遣ったから。

ウ 同じことを何度も話しているので、私の返事がなくても気持ちに通じ合っているから。

エ 通訳としての母がいないので、私の返事を聞いても何を言っているか聞き取れないから。

問八 ——線部G「ほんのりくやしかった」、——線部H「なんとなくさびしく眺めている私」とありますが、真美に対して「私」が感じている「くやしき」や「さびしき」それぞれについて、七十五字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

たとえば、電車の中で走り回る自分の子どもが他人から叱られたといった場合、親が叱られている子どもの気持ちに同調してしまうことがよくある。子どもが叱られることで親が傷ついてしまうのだ。親自身は叱られる子どもがかわいそうに思えて、ダメなものをダメと言われたことを受け入れるのがむずかしい。

1、親は叱ることで子どもに嫌われたり、物わがりの悪い親だと思われるのを避けたい、という気持ちもどこかにある。親と子どもの距離はとても近い。一心同体的な存在になっているようにも見える。

生まれたての赤ん坊が一心同体的であるのは当然のことだろう。おむつの交換や授乳など、ほぼすべての面倒を親が見ているからだ。その状態から徐々に成長し、親から身体的にも心理的にも分化し、独自の人間としてひとり立ちしていく。

自分に全面的な依存状態にあるときの乳児に対して、親はたくさんの希望や夢や理想的なイメージを託すことも多い。2、子どもが大きくなるにつれて、自分の思

いどおりにならない場面に何回もでくわし、子どもには子どもの好みがあることに気づかざるを得なくなる。バスや電車の中で大声で泣き叫んだり、体に良いとされる食べ物よりも、^{*}ジャンクフードのほうが大好きだったりする。そして、自分の好みとはまったく違うデザインシャツを気に入ったり、絶対にしてほしくないと思うような言葉づかいをしたりもするのだ。そんな体験を繰り返すうちに、子どもと自分とは別人格であるということを実感していく。

ところが、先に見たとおり親と子どもとの距離感がないまま親子関係が続くことも多く、その場合、子どもが良い子であるという評価が、親自身の評価に直結しやすい。

こうした傾向にあると、家庭の規範^{*}、社会の規範というものはない。子どもは自分ならば、規範に従って〇や×をつけるより、自分の考えや好みに同調しているからこそ〇であり、その子どもを愛するというような形になりやすいのだ。

子どもが幼稚園の頃、スニーカーを買いに行つてこんな経験をした。子どもは迷わずキャラクターつきの靴を選び、親としてはどうしたものかと決めかねていた。その様子を見た店主がこう言った。

「最近のお母さんたちは、お子さんがキャラクターつきの靴を欲しがると怒るかたもいらっしやいますからね」

私としては、ゴチャゴチャとした多色使いのキャラクターつきの靴は、あまり好みではないので避けたかった。私自身のセンスが悪いと思われることへの怖れもあったと思う。だが現実の子どもは、そのキャラクターが好きだから欲しいというだけなのだ。母親の関心は、子どもが何を欲しているかよりも、あるべき姿やどう見られるかに偏りがちになる。手作りのおやつ、凝ったお弁当なども、もしかするとまた別のあるべき姿、ありたい姿なのかもしれない。

ただ、それは本当に子どもへの幸せや満足につながるのだろうか。こうありたい、という自分のイメージや欲求の達成が先行していかないだろうか。自分の描いた夢のピースを組み立てることに熱心なあまり、子どものニーズに手をさしのべることが後回しになってしまっではないだろうか。

加えて、自分なりの価値基準や規範が見つからない一方で、親の「こうありたい、こうしたい」というイメージの実現はやさしくなっている現実もある。

3

、計画出産などはどうだろうか。たまたま道で出会った妊婦さんに「いつがご予定なんですか？」とたずねたことがある。すると返ってきたのは「本当は一月ですが、仕事が忙しくなるので年末前に産む予定です」という答えだった。行きつけの店のスタッフさんも大きなおなかで「一二月が予定なのですが、ずれると保育園の申請が間に合わないの、一二月には産む予定です」とさりと語る。子どもを持つかどうか、いつ産むかといったことでさえ、人の手でなんとかなる領域が広がっている。望んで思いどおりにならないことのほうが少ないのではないかと、思えるほどだ。

多くの領域で可能性やできることが広がり、思いどおりになることが増える状況では、どれが正しく、どれは避けるべきことなのかを判断することはますますむずかしくなるだろう。子育ては、親にとって思いどおりになってもならなくても、本当にこれでいいのかという不安を抱えながら、ということになりやすい。しっかりと規範を持たないまま、子どもをまわりと同じかどうか、親自身のイメージに合うかどうかで判断するしかないなかでは、不安は増すばかりだ。

一方、親のイメージに合わせ、親の思いどおりにふるまうことを要求される子どもはどうなるのだろうか。親のそういう姿勢は、子どもが独自の存在であろうとすることを規制する方向に向かいやすい。子どもも、自分自身の好き嫌いを表現しなくなっていく。こうした、これが好きという思いに関心を払われることが少なければ、自分が何が好きで何が嫌いか、自分にとってどんな状態が幸せなのか、よくわからなくなっても不思議はない。

こうした親による「自分⇨子ども」という同一視が強くなるのが、「いじめ」への対応だ。子どもから学校でいじめられたと打ち明けられたときによく見られるのは次のような対応だ。

▲「いつ、誰に？　どんなことされたの？　どうして？」と強い口調で質問攻めにする。

——こうした質問は「いじめられるなんてダメじゃない（やられること自体が×）」というメッセージとして伝わる可能性がある。つまり、子どもとの情緒的な距離が近いほど、子どもがやられたことは親自身がやられた体験とイコールになる。そのため、まず「何てひどいの」という怒りでいっぱいになったり、その怒りのせいで、その気がなく

ても詰問口調になってしまい、結果としてそれが子どもを責めているように受け取られてしまうこともある。怒りにまかせて、学校や教育委員会へクレームをつけるといった行動にもつながりやすい。

▲「あなたが何か嫌われるようなことをしたんじゃないの？」

「あなたがダメだから仲間はずれにされるんじゃないの？」という質問をする。

——こうした質問にこめられているのは「あなたに非があるからやられるのだ」というメッセージだ。親は子どもが自分がいじめられたという感情の波立ちを静めることに手一杯で、いじめられて傷ついている子どもの気持ちをおだめたり慰めたりしにくくなっている。理不尽な目にあつたときに、自分がいけないからだ、と感情を抑え込むやりかたは、より深く心をむしばむことになりやすい。

それでは、親はどう対応すればいいのだろう。親の側は怒りや悲しみを感じたとしても、その感情に運ばれるままにしたり抑え込もうとしたりするのはなく、子どもの気持ちに対してのイメージションを拡げてみる。

「それじゃイヤだったろうね。くやしかったね」といった表

現で「君の気持ちが変わるよ」というメッセージを送ることが可能だ。共感とは、子どもと同じように感じ、同じように反応することではない。子どもがいま感じていることを言葉にしたり、「いまこういう状態なんだね、わかるよ」と*

フィードバックしたりすることなのだ。子どもはいじめられた思いを聞いてもらい、「その気持ち、わかるよ」と受け入れられることでほっと安心し、それで済むことも多い。

(巖谷奈々『〇のない大人 ×だらけの子ども』による)

【注】

*ジャンクフード——総合的な栄養のバランスを欠いた食品。

*規範——ものごとを判断する規則、ルール。

*ニーズ——要望。

*情緒的——怒り・悲しみ・喜びなどの感情。

*詰問——相手を厳しく責めながら、返事を求めること。

*フィードバック——得られた情報を振り返し、アドバイスするために元に返すこと。

問一 ——線部A「子どもが叱られることで親が傷ついてしまうのだ」とありますが、それはなぜか。解答欄にあてはまることばを、文中から書き抜いて答えなさい。

問二

1

3

 にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア けれども イ たとえば ウ また

問三 ——線部B「お子さんがキャラクターつきの靴を欲しがると怒るかたもいらっしやいますからね」とありますが、なぜ母親は子どもがキャラクターつきの靴を欲しがると怒るのか。その理由として正しいと思われるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもが、家庭の規範に全く従ってくれないことを許せないから。

イ 子どもを怒る様子を店主に見せ、しっかりした母親を演出しているから。

ウ 子どもが、センスの悪い母親だと店主に思われることを楽しんでいるから。

エ 子どもが自分の考えや好みと同調してくれないことを受け入れられないから。

問四 ——線部C「自分のイメージや欲求の達成が先行していいだろうか」とありますが、「自分のイメージや欲求の達成が先行していい」とはどういうことか。——線部Cの直前の段落から一文を抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。(句読点も一字とする)

問五 — 線部D「子育ては、親にとって思いどおりになってもならなくても、本当にこれでいいのかという不安を抱えながら、ということになりやすい」とありますが、それはなぜか。筆者の考える理由としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 親が正しいと考えていることは世間的には非常識なことばかりだから。

イ 親の子どもの頃と現代では差があり、時代遅れおくになるかもしれないから。

ウ 正しいものとそうでないものを判断する明確な基準がわかりづらいから。

エ 最終的に子育てや子どもの成長も、お金をかければ思いどおりにできるから。

問六 — 線部E「親のイメージに合わせ、親の思いどおりにふるまうことを要求される子どもはどうなるのだろうか」とありますが、この問いに対する筆者の考えを、理由もふくめて答えなさい。

問七 — 線部F「子どもの気持ちに対してのイメージーションを拡げてみる」とありますが、親が想像を拡げると、子どもにとってどんな利点があるのか。説明しなさい。

三

次の①～⑤の——線部のカタカナを漢字にしなさい。

- ① 将来はウチユウ飛行士になりたい。
- ② 現状をカイカクしようと試みる。
- ③ 考えごとをしながら歩いて道をアヤマる。
- ④ 母にたのまれてユウビン物を出しに行く。
- ⑤ 犬も歩けばボウに当たる。

